

三遠南信地域における中央構造線文化軸

—豊かであった山間地域—

藤田佳久

1. はじめに

まず、日本地図の中部地方の南部を見てみよう。中部地方は、まさに日本の屋台骨である山地が、北から北アルプス、中央アルプス、南アルプスと順に並ぶ。そのうち南アルプスが南北に延びる南方部分は天竜川がその山系を横切り、いわゆる天竜峡の溪谷付近で、愛知、静岡、長野の三県の県境が収斂している。つまり県境ゾーンである。

今でこそこの県境ゾーンは山脈や尾根筋で区切られたイメージであるが、かつて人々が徒歩や馬で交流していた時代は、直線状に伸びる尾根筋は両側の地域を結ぶ優れた交通路であった。つまり両地域を分断するのではなく、逆に両地域を統合する機能があったのであった。たとえば、古代から中世にかけて、愛知県と静岡県を分ける山地の尾根筋上には多くの寺院が配置され、行基や弘法大師建立の伝承を持っている。伝承はともかく境界の尾根筋に寺院が建立されていたことは事実であり、両側の山地の裾に広がって生活する人々は、これらの寺院を経済的に支えてきた。尾根筋を断絶の境界とする認識は弱かったといえる。近代になって鉄道や自動車の普及する中で、山地が地域を分断する境界に変わっていったのである。

話を前述した三県の境界ゾーンに戻そう。このゾーンを中心に、地図上では分断されているこのゾーンは、お互いの接触する隣接地域が広めのまとまりをみせ、ここ30年ほどの中で「三遠南信地域」と呼ばれるようになった(図1)。愛知県東部の東三河と静岡県西部の遠州、それに長野県南部伊那地方のその南半分の下伊那郡の地名から「三」、「遠」、「南信」の文字を取り出して呼称したものであり、最近では新たな地域づくり運動として、この呼称が盛んに使われるようになった。しかし、歴史的にはすでに遠く古代以前から存在していたこの地域の枠組みであった。それはなぜか。

境界ゾーン部分だけでは、尾根筋の両側の細長いゾーンのみになってしまうが、より広いまとまりを生み出したのは、この地域を貫く中央構造線

のたまものであり、ラッキーなことでもあった。つまり、山地、山脈の統合的な境界ゾーンに加え、中央構造線の谷が古くからより外部との交流をもたらし、特有の文化、社会、経済の豊かな蓄積を生み出してきたのである。それは、今日の山村、過疎、限界集落、など条件不利地域とみなされる山間地域がほんの少し前までは平野部よりも豊かで活気に満ちた地域であったことを示している。

本論はその実体を主に山間地域を中心に示そうとするとところに目的がある。



図1 「三遠南信地域」と県境の山間地域

2. 中央構造線

そこです、中央構造線について触れておこう。

中央構造線は、長野県の中央部にある諏訪湖から南アルプスの西側に沿い、三峰川、遠山川、そして天竜川を横断し、三河の豊川に沿い、三河湾から伊勢湾を横断、三重県の橿田川から吉野、紀ノ川、さらに四国の吉野川から松山、九州の阿蘇山以遠にまで続く日本最長の大断層である（図2）。この断層を示す構造線はこの南側を外帯、北側を内帯と呼び、前者は堆積層、後者は地下のマグマ起源の隆起した花崗岩からなり、その両者が接触している境界部分を中央構造線と呼ぶ。

そのため、この接触部分は風雨の浸食に弱く、川ができ、自然の谷を作り、自然が作った道路として古くから利用されることになった。それが地域内

外との交流をもたらした点でラッキーであった。もちろん、自然が作る谷は、ところによっては急峻で、人々はその迂回路をさがし、併走する尾根筋を利用したりした。三遠南信地域内にもそのような難所があり、人々は大きく西側へ迂回し、のちの伊那街道（三州街道）や別所街道になり、遠山川の下流域では隣の伊那山脈の尾根道を利用した秋葉道としても展開した。とくに西側では、鳳来寺火山の西側などに第三紀層の谷が連なり、その北側には、花崗岩が風化によってできた小さな盆地（洞）がつらなっている。のちにはこれらの盆地をつなぐ道がいくつか生まれ、前述の伊那街道（三州街道）や別所街道など、地域の内外を南北につなぐ主要なネットワークに幅が生まれた。

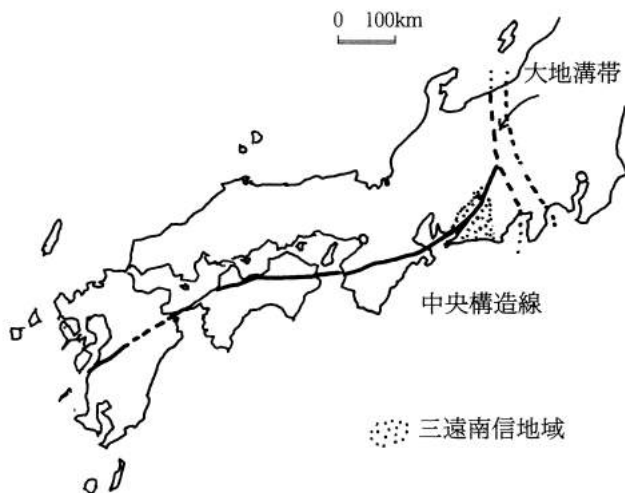


図2 中央構造線と対象地域

3. 中央構造線を巡る生活空間と環境変化

このような形で形成された中央構造線を巡る道のネットワークはすでに縄文時代には形成されていた。以下、それを時系列的に見てみよう。

3.1 縄文、弥生期の生活空間

たとえば、図3に示すように、縄文、弥生時代の遺跡調査の結果、山間部の遺跡を中心に黒曜石からつくられた鎌などの細工がこの地域の北方ほ

ど高い密度で発見されたが、原材料の黒曜石は、諏訪湖のさらに北の和田峠が産地であり、それが伊那谷を南下して天竜川や豊川流域の下流域であるこの一帯に及んだことを示し、黒曜石やその加工技術が伝播、受容されたことを示している。一方、畿内大和の西側の端にある二上山から産出され、天皇陵の築造にも利用されたというサヌカイトは、伊良湖水道を超え、豊川や天竜川を北上し、山間部へさかのぼる分布を示している。つまり、縄文時代にはすでに三遠南信地域の山間部は、中央構造線を軸に北と南から人と物、そしてそれに伴う情報の交流があったことを示している。ではなぜ山間部に目立つのか。

今日設定されている縄文時代は、1万年もの長さであった。そのうち、はじめから3分の2の6千年ほどは間氷期の中でも温暖で、海面は高く、今日の沖積平野は海面下にあった。つまり、その時代の人々の生活空間は、今日の沖積平野ではなく、乏水性の洪積台地と山間部が中心になったためである。当然、自然豊かな山間部に生活空間の拠点が形成され、この時代の山間文化が日本文化の基盤となったといえる。三遠南信地域の山間部も同様であった。多くの縄文遺跡が高い密度でこの地域の中で発見されるのも当然であり、全国的にも、中部地方以北の山間部に縄文文化が卓越して

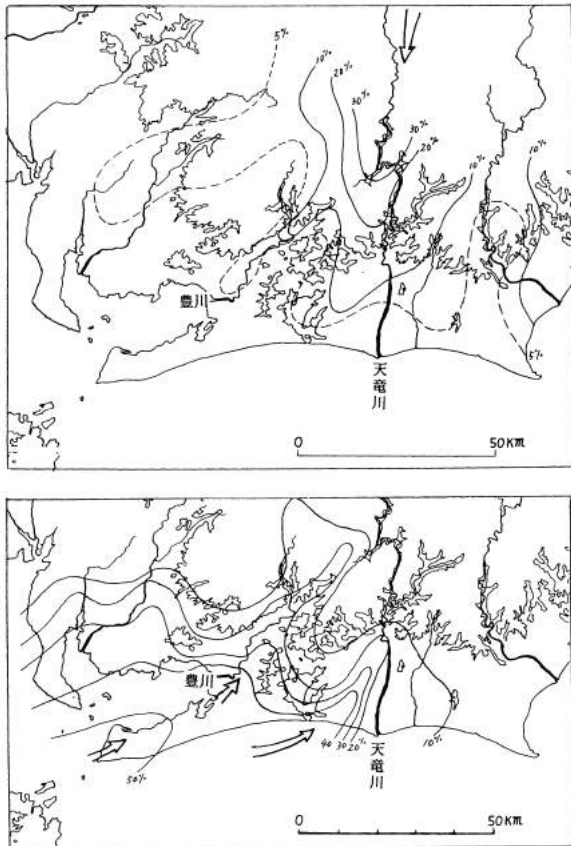


図3 三遠南信地域における黒曜石（上図）とサヌカイト（下図）の石鏡の分布（向坂原図）

見られ、花開いた。

それが後半の3分の1の縄文晩期の期間になると、気温の低下が見られ、海面下で堆積しつつあった沖積地が海面上へ浮上するようになり、以降は海面上に河川による堆積で沖積地が形成されるようになった。時折、新聞紙上に見られる縄文晩期の米粒の発見は、浮上した沖積平野の上を日本列島西部から上陸した稲作が、列島を突っ走り、東北地方まで到達したということであり、自然環境の大きな変化があったことからすれば不思議なことではない。

このことは、稲作は弥生時代とするこれまでの日本史の時代区分がグレイだということになる。大きな環境変化が起こった縄文晩期こそ、時代変化の境界であるべきだといえる。

この結果、この三遠南信地域の沖積低地でも、微高地である自然堤防上に、河川氾濫におびえつつも居住地が見られるようになり、弥生時代にはそれがさらに一般化した。もちろん、山間部での居住も継続した。環境変化の中で山間部の人々は、居住や生活の様式を変え、対応したことがうかがわれる。

3.2 古代の生活空間

古代は、各地の豪族を支配した大和朝廷による中央集権体制が確立し、その権力が及ばなかった東北地方もやがて組み込まれ、各地域はその支配下に置かれた。それは701年の大宝律令による国郡制の施行に現れている。

たとえば、三河地方は、今日の西三河の「三河の国」と東三河の「穂の国」から構成されていたが、それが旧「三河」の「三河」名のもとに合併され、国府は旧「穂の国」に置かれた。そしてその下に各郡が設定されたが、いわゆる奥三河と称される山間部は、当初旧穂の国のセンターであった穂評から穂飢郡(のち宝飯郡と表記)へと改称された広域の範囲に含まれていた。その折、旧「穂の国」の平野部を中心とする飽海は、渥美と八名の両郡に分離されている。つまり、奥三河の山間地域は独自の地域名称をまだ公式には持っていなかったのである。当時の地名集である『和名抄』を見ても奥三河の集落地名は記述されていない。漏れているといった方が正確であろう。縄文晩期からの厳しい気候環境は古代当初、山間部への関心の低下があったと思われる。

それが独自の地域として認識されるのは、平安時代、それも10世紀に入っ

てからであった。その名称は「設楽郡」であり、郡として独立した。地名は豪族の設楽氏に起源があるとされている。ここに奥三河の山間地域の独自地名が認知されたのである。この背景には、縄文時代晩期の寒冷化が次第に温暖化に転じ、平安時代にはその影響で、比叡山や高野山のような山岳宗教の拠点が形成され、山岳修験が山間地域へ広がったこともあった。そのような中で、山間部の集落が改めて注目されたものと思われる。

設楽地方でもより山間部にあたる現在の北設楽郡における地名について、カイトあるいはカイツ名称が付せられた地名の分布は興味深い。カイトやカイツは古代の柵で囲った集落カイト（垣内）を称した古い言い方であることからすれば、これは古い集落名起源の地名と思われる。それによれば、津具村と富山村を除く奥三河の町村に集中的な分布が見られる。これらの地名を有する集落はすべてが古代起源とはいえないまでも、かなり古い集落であり、これらをベースに設楽氏などの豪族や荘園が設定されたと思われる。古代には表面に把握されなかった生活空間が存在していたことがうかがわれる。その地名を持つ集落や分散立地する個々の農家は、主に南面する斜面上に立地し、冬でも太陽光線を斜面に対して直角に受容し、面積あたり最大の受熱量を得、沢の水を飲料水に利用し、山地斜面で焼き畑も行った。そして背後の尾根道を簡単に利用でき、外部ともつながっていた。山地環境を最大限にいかした最適立地の居住で、こんにちの山村にも継承されている。これは隣接する南信と遠州の山間地でも同様であり、のちにこれらの集落が栄える街道の要になってネットワークを形成することになった。

3.3 中世の生活空間

中世になると、気候は再び寒冷化し、農民の農業生産力は劣化して、それをベースにしていた多くの貴族階層は経済的基盤を失い、荘園制度の崩壊は所領や農村の社会不安を高めた。その中で、新たな武士階層が表舞台に現れ、所領を確保し、お互いに権力争いを繰り返した。その中でも、応仁の乱（1467～1477）は最大級の国内戦であった。荘園領主を失った農民たちは、次々と戦に加わった武士たちに徴発され、暴力を受ける過程で、自分たちを守るために、それまでの一軒ずつの分散居住方式をやめ、近くの農家同士が集まり、防御のために周囲に水濠を巡らすなどして、いわゆる集村化した村落形態へ移行した。ちょうどライオンの攻撃から身を守る

ためにシマウマが互いに円陣を組んで対抗するのと同じ原理である。ここに世界でもあまり例を見ない日本の集村が形成された。まさに自力、独立した村落であり、やがて協同でため池を築造し、水利を管理し、入り会い山の規則を生むなどして、世界に例を見ない村落共同体を確立していった。中には自分たちだけで裁判権（自検団）をもつ村落も現れた。日本史上まれな農村の独立空間の誕生であった。

山間部の村も同じような方向を持ったが、自給経済がベースであったために、地元土着の開発領主、あるいは応仁の乱の敗者などによる外から侵入した豪族の支配を受けるケースも多かった。三遠南信地域の山間地域では、天竜川沿いのうち、奥三河と南信濃の国境を挟み、熊谷家が領域を拡大し、北接する南信州の関氏と対峙、対岸の遠州側では現在の水窪一帯を片桐氏、その南を天野氏、片桐氏に北接する南信州を遠山氏が支配し、隙間なく所領が張られた。うち14世紀に定着した熊谷氏は、その前に紀州田辺から流れてきたとされる田辺河内守綱秋氏の後を継いで、三河の北東端である旧富山村河内を拠点に、南信州の天竜川沿いに焼き畑耕作をベースにした急斜面上を北上しつつ新たな村づくりを100年かけて行っている(図4)。こうして中世の土豪が三遠南信の国境一帯に並立することになった。

ところで、この熊谷氏は18世紀まで日記を記録し、それによると、はるか離れた都での出来事を逐一記録し、それもかなり正確である。情報が広くから熊谷家へ集まっていたことを裏付け、決してこの地が情報の入らない僻遠の地ではなかったことを示している。その背景の一つには南北朝期に破れて逃避した南朝方が、吉野山から東進し、伊勢から渡海して三河の豊川沿いをまさに中央構造線沿いに北上して、伊那谷の大鹿村一帯へたど

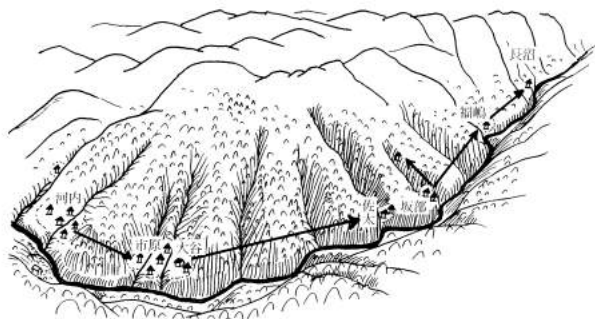


図4 『熊谷家伝記』の村々の天竜川沿いでの開拓立地拡大図

り着いたという南朝伝承がこの中央構造線沿いに沢山存在することがあった。伝承ではあるが、一部の遺跡を宮内省も認めているほどである。熊谷氏の日記は、この一帯の豪族が避難してきた南朝方を支え、流れてくる都の北朝情報を正確にとらえようとした証とも見ることができる。最短距離を結ぶ中央構造線は、中世においてすでに人、物、情報を的確に運んでいた回廊であったということができる。なお、熊谷家の領域は、中央構造線が現在の水窪町から天竜川支流の遠山川に抜ける筋から少し離れた天竜川沿いの急斜面上にあり、外部からはすぐにはたどり着けない一帯にあった。

4. 近世の街道文化

4.1 幕藩体制の網

江戸時代に入ると、徳川政権は全国に幕藩体制の網をかけた。三遠南信地域の国境地域でも新編成が行われた。まず、それまで独立天下であった豪族が、その上に幕府の網がかけられ、またその権力さえ奪われたことである。

たとえば、南信州遠山側流域を支配していた遠山氏は、家督継承の乱れで、その所領を幕府直轄領に編入されてしまった。幕府は新政権の拠点になる江戸の町造りに大量の木材が必要となり、南アルプス一帯の森林資源を木曾山とともに直轄領へ編入している。そしてこの遠山一帯を囲い込み、外部からの侵入を禁止すべく、周囲に沢山の関所を設けた。こうして囲い込まれた住民は、江戸の家の屋根板を押さえる樽木の生産に従事し、遠山側から天竜川に流下し、バラ狩りから筏に組んで、河口の掛塚へ運搬した。遠山郷はこうして実質的に外部と遮断されてしまった。江戸時代も後半になって、郷内の森林資源が減少すると、その規制も弱くなり、飯田から伊那山脈を越えて山道が遠山郷へ延び、さらに南の青崩峠を越えて、秋葉山への道、秋葉道が外部とつながった。遠山郷の和田にはその後峠越えのための宿駅ができ、街道町が次第に形成され、今までの囲い込みをぶっ飛ばすように、各地へ出かけ、乗客を迎え、そして多くの神仏を勧請し、祀った。その多くの石神仏には病気や洪水、火事への恐れを解消してくれる願いが込められている。

余談だが、筆者らはそこに集まった石神仏を掘り起こし、33体の石神仏を選んで巡りができるように「神様王国」という名称で、地域おこしをめ

ざし、まずは秋葉街道の遠山郷和田（現在は飯田市南信濃和田）の街道町を中心にオープンした。これら石神仏を巡れば、まさに江戸時代の後半から中央構造線の持っていた外部世界を知ることの出来るネットワーク機能と、住民たちの新たに知った強い安全願望がじかに伝わってくるとともに、先人たちの生み出した知恵を受容することができる。

遠州側の片桐家も同様で、ほとんどの山は幕府の御料林として囲い込まれ、こんにちも広大な国有林として継承されている。そのほかの豪族の所領も幕府の天領として編入された。

4.2 主要街道システム

以上のように、国境ゾーン一帯は幕府の直轄領に編入された。それまでの土豪は遠山家のように完全に潰されたケースもあるが、そのほかの土豪は領域の支配権こそなくなったが、同族の集団がそれを支えていたため、村落レベルでは同族集団の強みが発揮される場合も見られた。そのような中、あらたな変化も生まれた。それが次第に強化されていく域内を貫通する商品流通とそれを支えた街道システムであった（図5）。

その代表的な街道が三河側からいえば、伊那街道で、南信州側からいえば三州街道である。

この街道は、南から見れば、三河の吉

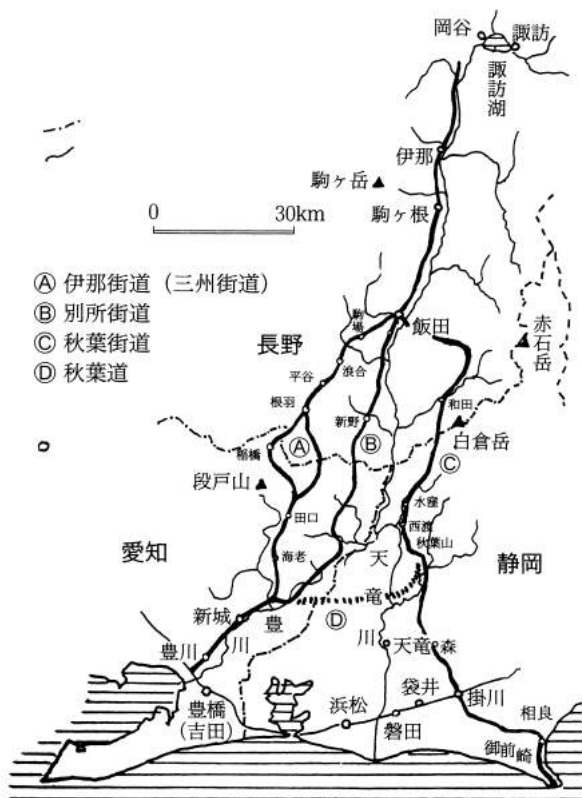


図5 天竜川・豊川沿いをむすぶ街道図

田（現在の豊橋）から水運で新城へ達し、新城で荷物を駄馬に乗せ、豊川右岸沿いにさかのぼり、大海から支流の宇連川に別れ、本流をさかのぼり、田口へ。さらにそこから二つに分かれ、一つは稲橋経由で、信州側へ入り、根羽、平谷から駒場、そして飯田へのコースである。その際、途中の田口から北上して津具経由で南信州へ入り、根羽で前のコースと合流し、飯田へ向かうコースの分岐道もある。もう一つは吉田から豊川の左岸をさかのぼり、鳳来寺山麓の溪谷を過ぎ、本郷から豊根を経て南信州へ入り、新野から天竜川河谷に入り、飯田へというコースである。これは本街道ともいふべき三州・伊那街道に対して裏街道的であり、別所街道と称される。そしてもう一つが、前述した飯田から遠山郷を貫くようになった秋葉道で、秋葉神社を経て森、掛川、さらに相良、御前崎へと続く。前述のコースも同様であるが、御前崎へつなぐコースはまさに「塩の道」であった。秋葉道は秋葉山から西の天竜川へ降り、そのまま三河との国境を越え、大野へ出て鳳来寺への参拝のコースになっていた。三河側はこのコースを秋葉道と呼んだ。

本街道である伊那街道（三州街道）は、すでに中世あたりから原形が現れていたようであるが、本格化したのは江戸時代からである。当初は、沿道で馬を持つ農民たちが冬の農閑期に町へ農作物を売りに行き、帰りに商品を購入して売り、駄賃稼ぎをしていたのが、やがて商品の需給がたかまる中で、本格的な運送業者になり、その方式を中馬といった。一人の博労が3～4頭の馬の背中に荷物を振り分け、運搬する姿が一般的になっていった。戦国期が終わり、平和な時代が訪れると、確実に荷物が届く仕組みが必要とされ、工夫され、それが商品経済を普及させ、広げることになった。それは専業の運搬人としての博労であり、やがてとくに陸上交通に頼る信州の道沿いで中馬が活発になり、彼らにグループが形成され、特権化した面もあった。

江戸時代に整備された五街道では、宿駅ごとに荷物と馬を変えねばならず、手間と荷物の損失も生じた。その点、大きな脇往還ともいえるこの伊那街道（三州街道）である本街道などでは、そのような制約もなく、一人の博労が出発から到着まで担当し、今日の宅急便の仕組みの先駆的システムを作り出したといえた。またコースのほとんどが天領であったことも自由な中馬が発展した。それに対して宿場の問屋などが反発し、幕府に禁止を求めたりしたが、幕府は制約させず、それも地域経済の発展を促した。

多くの中馬は南信州が中心で、そこでは1万頭近くの馬が運搬に従事した。伊那街道では、江戸時代中期以降になると、中馬の特権に対して三河側の津具の馬稼ぎたちが自立のための抵抗運動を起こすほどであった。



図6 「山湊馬浪」と称された新城の賑わい風景
(「三河名所図会」より)

こうして中馬はさらに広域に広がり、江戸まで出かけるケースもあった。中馬のための宿駅もでき、馬宿が並んだ。中馬の起終点の新城や飯田は城下町による町ではあったが、馬の宿の町として経済的に発展し、新城では「山湊馬浪」と馬であふれる町の勢いが形容された(図6)。山間部の尾根道では、馬のすれ違いがやっとなんとかいうところも多かったが、水産物や山地の産物、それに城下町や在町などで加工された品など幅広い商品の行き交う街道沿いでは、馬宿だけでなく、普通の宿、博労の稼ぎなどのほか、馬のえさ、運送道具、食べ物屋、そのほか多くの商品や雑貨が作られ、販売された。伊那街道の道中沿いでは大海、海老、田口、武節、根羽、平谷、浪合、駒場などに宿駅が形成され、貨幣経済がさらにこの地域に普及した。

かつて、筆者のところへやってきたアメリカの二人の大学院生は、この状況を調査、研究し、そのうちの一人は、明治以降の日本が急速な近代化を遂げられたのは、このような庶民による統合された地域システムが江戸時代においてすでに成立していたからだと論じて、博士論文をまとめ、博士の学位を取得している。制度化された五街道はともかく、庶民の道でさえ、そのような地域経済を巻き込んだ輸送システムが民間の世界でできあがっていたことに彼らは驚嘆したのである。

4.3 地域文化への影響

このような輸送業の活性化は、さらに地域文化にも影響を与えた。とくに起終点の一つ飯田は、新城など三河からあるいは三河方面への荷物の集散地であると同時に、信州の諏訪、松本方面との活発な荷物の発着を行う

集散地であり、その先は北国街道で北陸地方とつながるといふ広大な後背地域を有していた。したがって、飯田には多くの経済的利益がもたらされ、格子状に町割りされた各通りは、それぞれ地域とのつながり、別の問屋が配置され力を発揮していた。それらの問屋や商人の経営者の中からは、江戸や京都とのつながりを持つ者も現れ、菱田春草のように画家が生まれたり、太宰春台のような儒学者が出たり、そののち、平田国学を研究する文化人もあらわれ、新しい蘭学の医術や医学を学び、取り入れたりする関島良致のような医師もあらわれて、飯田の文化を高めた。これは、飯田が小規模ながらも城下町であり、城主がそのような庶民の文化活動に理解を示したこともあったが、それ以上にそのベースはまさに信州中馬の経済活動の蓄積によるものであった。

また、新城も飯田ほど広い後背地はもたなかったが、水運で吉田（現在の豊橋）と直接的につながり、その先は水運で伊勢や関西にも間接的につながっていた。伊那側へのネットワークも後背地を広げていた。そのため豪商も町の中に誕生するが、その中で醸造業や米穀業を扱う豪商太田弥平太重永家の四男であった太田白雪は、父親の影響で俳諧に興味を持ち、松尾芭蕉の来訪時に三河を案内や接待するほどの有力な俳人になっている。彼はその後の新城文化の代名詞として、そのレベルを上げたが、彼もまた、商業資本の蓄積の上に登場したといえる。

これらのうち、国学や医学はやがて三州街道沿いにつながり、国学では奥三河の古橋家のような豪農が拠点となり、蘭学に関心を持つ蘭方医を生み出して巻き込み、新城や吉田など豊川下流域と連動したと言ってよい。吉田（現在の豊橋）ではすでに鈴木梁満のような国学を学ぶ先覚者も出ていたが、国学者で羽田八幡宮の神職でもあって、のちに開放的な図書館である「羽田八幡文庫」を実践的に設立した羽田野敬雄が、最初の平田門下生となった。この文庫設立に当たっても、宿駅であり、城下町であった吉田の国学者であり俳人でもある商人たちの寄付によって可能であった。商人の間にも平田学が広がっており、幕末頃の三河では神官、武士、豪農、商人など50人以上が平田門下生であったという。

国学は東隣の遠州でも浜松の真淵、次いで二俣の眞龍による歌会中心の国学が行われていたが、羽田野は歌会による運動よりは古学への思想運動のレベルに達していたとされ、それが図書館や教育などの実践的活動につながっていた。

一方、蘭方医もオランダの医学を国内で学び、東三河の各地で誕生、開業し、その後の流行病である天然痘への予防技術を習得して地域を安定させている。街道のネットワークが人と情報を有効に広げた例だといえる。

5. 民俗芸能—花祭り—

5.1 花祭り

以上のように、中央構造線がもたらした地域ネットワークは、国学という思想や蘭学の医術をこの一帯に広げた。このような例はほかにもあるが、その中でも代表的な例に民俗芸能、とくに「花祭り」をあげることができる。

「花祭り」は奥三河から南信州、さらに遠州北西部の山間地域に見られる民俗芸能で、まさに三遠南信の県境ゾーンに凝集した神楽祭りであり、中央構造線の賜ともいえる（図7）。呼称は奥三河では「花祭」だが、南信州では、「霜月祭り」（遠山郷）、「雪祭り」（新野）などと違いがあり、基本は共通するが、お互いに少し違いがみられる。もっとも、奥三河の「花祭り」も集落の間でリズムや舞に違いが見られるから、山を隔てて距離が離れると、その違いもそれなりに出てくるといえる。しかし、その共通項は、冬に入り、最も太陽が南下し、太陽光のエネルギーももっとも弱くなる厳寒

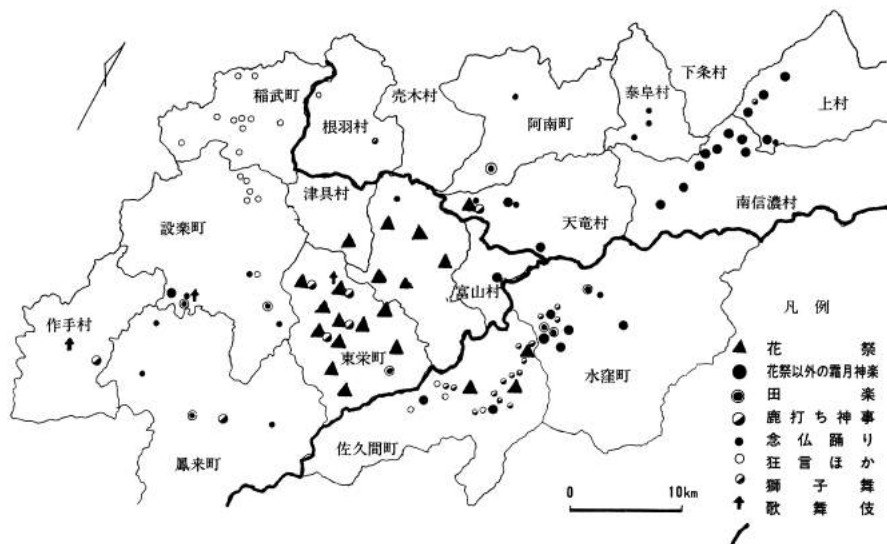


図7 三遠南信県境町村における民俗芸能の種類別分布

期に入った、かつての11月に、全国からの数万の神々を招き、再び太陽の明るさとエネルギーを復活してほしいという願いをこめた祭りで、舞庭（まいど）では全国の神々に祀り作法や舞を見せながら祈願するという手法にある。

それが、亡くなった家族や知人が復活して、再びこの世に戻ってきてほしいという「生まれ清まり」への願いとなった。かつては各集落の中で、その年になくなった人のいる家の庭で催したりして、盆供養の役割も持っていた。また、江戸時代には7年に一度「大神楽」と称し、複数の集落が協同で「花祭り」を行っていた。そのさいには、この世とあの世の世界を具体的に設け、その境を流れる三途の川を鬼が渡り、鬼があゝの世へ入り込もうと、あゝの世を囲っている柵を破って討ち入り、亡くなっていたあゝの世の人たちを引き出し、この世へ生還させるという演技が行われていた。このことは、紛れもなく「生まれ清まり」という「花祭り」の神髄を体現したもので、この祭りの趣旨が現れている。

そしてこの「花祭り」や時に行われた「大神楽」には、当然多くのコストがかかった。多くの米、酒、料理、衣装などがこの祭りのために消費された。天領であったことに加え、山間地域ゆえ、監視の目が弱かったこと、そして何よりもこの地域を貫く何本もの街道がもたらす経済的な利益による豊かさがその背景にあった。

5.2「花祭り」の二系

ところで、この「花祭り」は地元では当たり前であったが、これが広く知られるようになったのは、戦前、渋沢栄一と折口信夫らの一行が、南信州の阿南町の「雪祭り」の調査の後、三河北端の豊根村に入り、南信州との県境に近い三沢山内の花祭りを知ったことがあった。とくに折口は本来の神との交流する姿に新鮮さを感じ、後、祭りの一行を東京の国学院大学の郷土研究会に招き実演させたのがきっかけとなって、まずは在京の人々に知られた。そして、三河の地元出身の民俗学者早川孝太郎が、地を這うような実地調査研究の成果として『花祭』の大著を出版し、全国に知られ、「花祭り」という名称も定着した。早川の『花祭り』の著作を見て、折口信夫は、「花祭り」を自ら調査研究しようという計画を断念し、若干の解説記事を書いただけにとどまったという。

早川孝太郎は地元の利を生かして、そのほぼ全貌をとらえ、とくに奥三

河の「花祭り」を主に、呪術的始まりから、後半の楽しみの舞までを文字と描写絵、写真、地図まで取り込み、まるで文字の映像化を図ったような立体的な力作に仕上げた。そして「花祭り」を主に豊根村を流れる天竜川支流の大入川流域の「大入系」と東栄町を流れる振草川流域の「振草系」の二つにわかれることを感覚的ではあるが、明らかにした。

その際、筆者（藤田）は、よく知られている両者の間での舞庭の違いのほか、舞の演目の違い、そして何よりも村落形成の違いの存在がその背景にあることを指摘した。村落形成から見れば、もっぱら山地斜面の焼き畑中心であった複数の親村から山間の盆地底である「洞」（小盆地）へ移住開墾して、新たな村を作った入り会い出郷の村が、開田も出来、生産力も高くなり、村のまとまりと村づくりのために、「花祭り」の原型であった祭りを導入、新たな村づくりをおこなったものと考えられる。それが豊根村型、つまり、大入系であり、一方、東栄町では親村が入り会い出郷よりもよい立地の場所にあり、もっぱら親村の方が大入系系の「花祭り」をより楽しむの場として導入し、振草系へ編成したものと思われる。

5.3「花祭り」と中央構造線

ところで、「花祭り」が今日多くの見物客を集めるのは、隔世の感がある。かつて筆者（藤田）が雪の中で見て回った昭和30年代末の頃は、電灯もなく、農家の前の舞庭は暗く、見物客はその集落の人ばかり。明かりは湯を沸かす釜戸の火だけで、それに照らされて現れる赤鬼はすごみがあった。子供たちが順に舞う時の衣装や飾りは陰が多かった。しかし、まだ村人の数は多く、この日だけ許されていた悪口雑言は、外から来た筆者にも多く向けられた。

それが今や、ショウの舞台のようになり、赤々と電灯が照らす中で、多くの客の顔の中でリズムカルな太鼓のリズムとともに、とりわけ幼児から順に舞う姿は、多くの客を魅了する。この舞も集落により差が見られ、そこに各集落の演出が見える。つまり、多くはかつて伝播してきた舞をそれぞれの集落が独自に編成し、独自に作り出してきたといえる。そのため、同じ舞でも、集落によってリズムが微妙に異なったりし、それが舞にも影響している。

そして、この舞の演出こそ、江戸時代、この地域が伊那・三州街道によってより直接的につながり、さかんに行われた伊勢神宮参りにあったと思わ

れる。この街道は、三遠南信の人たちだけでなく、その外縁部の人たちにも利用された。吉田から船でいけば丸1日で海を越え、伊勢へ着いた。一方、伊勢湾を大回りすれば3~4日を要したからである。

伊勢へ着くと多くの場合、御師が案内し、神宮ではなく御師宅で参拝した。神宮は皇室の神であるからである。その御師宅の参拝所は、部屋の中央に天蓋がつるされ、その真下に釜戸が置かれ、参拝客はそれが見える位置に並んだ。それは、紛れもなく「花祭り」の舞庭と同じである。つまり、伊勢の御師宅の参拝所が「花祭り」の舞庭に再現されたということになるだろ

う(図8)。大入系は釜戸および天蓋の場所と舞庭の場所が区分され、より御師宅に近いが、振草系は、天蓋および釜戸と舞庭が同一空間にあり、神様たちとより近くで楽しめる。

そして参拝のあとは直来時間。御師宅ではじめて味わう料理やきらびやかで演出もきいた伊勢音頭の歌舞なども楽しんだ。ラインダンス風に描かれたダンサーたちがきらびやかに伊勢音頭を歌い舞う浮世絵などが土産に売られていることからわかる。これらの娯楽シーンは、「花祭り」の舞にも演出にも影響したに違いない。

奥三河のすぐ北、南信州の山村、天龍村の坂部の冬祭りのオープニングソングは、なんとずばり伊勢音頭で始まる。武士がおらず、固苦しくない伊勢は、寺社詣の許された庶民が毎年数百万人も押しかけ、伊勢は日本最大の庶民の参拝地であり、古市など歓楽街もそろった娯楽地となり、庶民のあこがれの地となっていった。全国から集まった人たちの交流の場にも

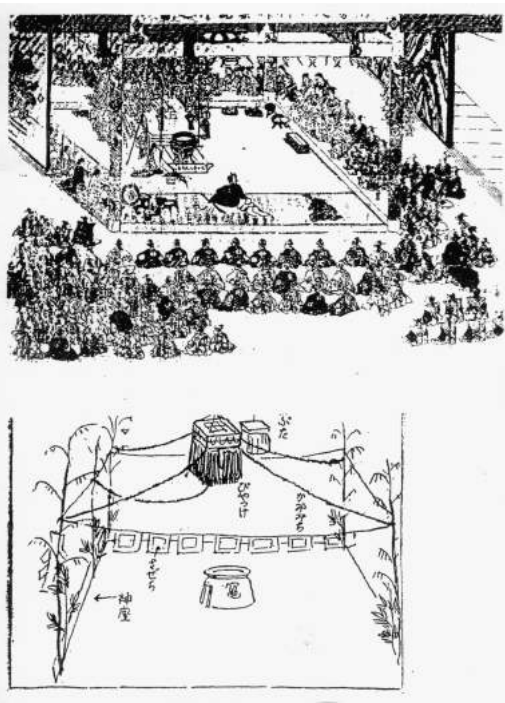


図8 伊勢神楽(上)と花祭り(下)の舞台装置の比較
(上は中川久兵衛蔵、下は早川孝太郎による)

なり、いわば、流行の発信地であった。農作物の新品種や苗木、新デザインの織物などが土産になった。三遠南信の人々も伊勢講を作り、伊勢参りへさかんに出かけ、時には奈良、京都、金比羅まで足をのぼし、他国の風土を体験し、多くの情報、文物、文化、流行ものなどを土産として持ち帰った。神楽である「花祭り」は、洗練された舞などにそんな伊勢参りの影響も受けている。それもまさに中央構造線が三遠南信の山間地域にもたらした大きな成果であり、それ故に今日、「花祭り」に参集する外国人も含め、多くの人たちが時代を超えた舞とその演出に魅了されるのだろう。

なお、「花祭り」は神を迎える行事などで白山信仰系の影響があるとか、古い史料からは山岳修験の影響もあるといわれている。活気ある山間地域にはいろいろな人、者、情報が集まってきた面もあり、それらが解析されたら山村の持つ文化性の一端をもっと浮かび上がせることができるだろう。ただし、呪術的な側面は、かつて江戸時代当初までこの地域の寺院の多くが、真言密教系であったこととの関係の方が密接であるように思われる。

また、中央構造線上にのる南信州遠山郷における「霜月祭り」も、この「花祭り」と同様の神楽で、もう一つの核であるが、こちらは朝からの神事のあと、「花祭り」のような舞よりは面姿で供養する神楽の奉納が中心である点に特色があり、素朴感がある。

6. おわりに

以上、県境を越えた地域形成が見られた三遠南信地域における中央構造線の役割について時代的な経過を含め検討してきた。

中央構造線は有史以前に自然が作り出し、自然に形成されてきた自然の道である。それが人間の登場と生活、文化の展開の中で、人、物、情報の流れを生み出し、地域間のネットワークを強め、縄文時代以来、この地域の重要なネットワーク軸を形成してきた。大枠では中世から江戸時代の初めには、地域内での充実が見られるようになり、すでに今日の三遠南信地域を形成していたとみる事が出来る。それ故、新生の明治政府下で設けられた新しい府県制では、きわめて一時的ではあったが、ほぼ三遠南信を包摂する「伊那県」の誕生があった。これはこれまで述べてきたこの三遠地域のまとまりを、為政者の中で理解する者がいて、新生「伊那県」を誕生させたものと評価できる。しかし、藩閥政府は江戸時代のこの地域の徳

川勢力の復活を恐れ、この実質的な理にかなった伊那県をすぐに解消し、しかもこともあろうに地元の反対を無視し、強引に成立させた愛知、静岡両県と、ばかでかい長野県の三県に分割してしまった。本来ならば、明治維新後の府県制設定時に「伊那県」が設定存続し、実質的な「三遠南信県」が誕生していれば、道路・通信ネットワーク、河川交通の流通によるまとまりの良さから、当初は生糸生産に特化した日本一の産業県になり、資本蓄積が進み、それを踏まえた近代化もかなり進んだことと思われる。もしそのように進めば、越境地域の議論はこの地域からは発議されなかったであろう。

しかし、現実には、3県の県境がこのまとまりのある地域をズタズタに切り裂いてしまった。中心に位置するはずのこの三遠南信地域はあらたに再編された愛知、静岡、長野の各県の周縁部に押しやられてしまった。いわば、劇的な逆転劇であった。こうしてかつての「三遠南信地域」は歴史的地域になってしまったが、やはり、伝統の力は1990年頃からかつての夢へ向けてその再生への志を持ち始めたという段階にきたことである。新たに、しかし、伝統をふまえた斬新な夢をどう設計するかが最大の注目される点であろう。その点では面白い試みである。

前述したように、三遠南信地域の民間パワーによる地域形成は江戸時代初期には見られた。いわば歴史的地域である。それを具体的に示したのが図9である。基本的には今日の東海道筋を中心にした東西軸ではなく、豊川、天竜川を軸とした南北軸であり、何本もの軸線が街道として活発な経済活動を生み出した。経済だけでなく、文化軸も形成されたことは本文でも触れた。地域の内的充実とともに、中央構造線の持つ特性から、地域外からのエネルギーやエンジンも加わった。畿内からの南朝方の流入や伊勢からのさまざまな情報、南からの熊野信仰、さらに伊勢信仰、北からの諏訪信仰、そして真言密教系から曹洞宗への改宗、それらが土着の勢力や文化と融合して優れた民俗芸能の文化を生み、幕末には国学や蘭学がネットワークを通じて広がり、民意の啓蒙を進めた。東西方向では同じ地域内での、特に三遠間の交流がみられた。江戸時代、吉田藩が遠州浜名湖岸まで所領を有し、吉田藩の手筒花火などの祭りが伝播していたこともその背景にあり、逆に幕末から報徳思想が遠州から三河へ浸透した。東海道の東西の通行量が増え、いわゆる姫街道もその影響を受ける中で、近代以降の豊橋、浜松の都市機能の分化への芽生えも見られた。

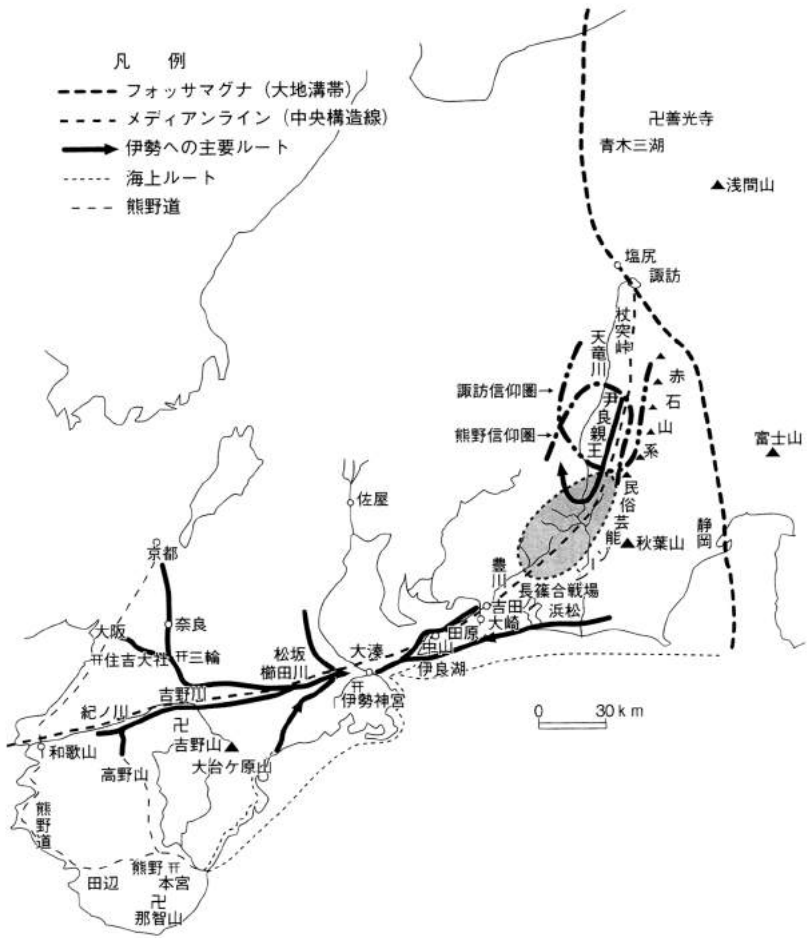


図9 三遠南信と伊勢・関西を結ぶ歴史的ネットワーク

(藤田原図)

そんな中、「三遠南信地域」のまともは戦後の高度経済成長期の始まりあたりまで続いた。それが弱まったのは、戦後の地方自治制度がようやく経済力をベースに県行政単位に力を入れるようになり、県の囲い込みの中で、目に見えない壁が厚くなり高くなったことにあった。1990年から始まった「三遠南信地域」づくり運動は、改めてその壁の厚さを感じつつ、それを乗り越え、かつてのより自然体の地域への共感を模索しつつ、歴史的地域の復活への実験に乗り出したといつてよいだろう。

〔参考・関連文献〕

- ・藤田佳久（1981）『日本の山村』、地人書房。
- ・藤田佳久（1991）『豊橋・浜松地域の展開と両地域の連関に関する研究—二眼レフ的地方都市圏域の構造に関する研究—』、愛知大学中部地方産業研究所。
- ・藤田佳久（1992）『奥三河山村の形成と林野』、名著出版。
- ・藤田佳久（1995）「『天竜川・豊川流域文化圏から東・西日本をみる』をめぐって」、『天竜川・豊川流域文化圏から東・西日本を見る』、愛知大学総合郷土研究所刊、所収。
- ・藤田佳久（1997）「『花祭り論をめぐって』、『花祭り論』、愛知大学総合郷土研究所刊、所収。
- ・藤田佳久（1998）「『県境を越えた地域づくり—「三遠南信地域」づくりを中心に—』、『県境を越えた地域づくり—三遠南信地域づくりを中心に—』、愛知大学総合郷土研究所刊、所収。
- ・藤田佳久、高木秀和（2006）『南信州遠山郷の和田地区に「神様王国」を作る基礎的研究』、『年報・中部の経済と社会』、愛知大学中部地方産業研究所刊、2005年度版、所収（あと2013年度版まで継続中）。
- ・藤田佳久編著（2011）『山村政策の展開と山村の変容』、原書房。
- ・藤田佳久（2011）「東三河の歴史的成立」、『年報・中部の経済と社会』、愛知大学中部地方産業研究所、2010年度版、所収。
- ・藤田佳久（2013）「『三遠南信地域』づくりの物語—私の関わり方にも関連して—」、『地域文化』114号、八十二銀行刊、所収。
- ・藤田佳久（2014）「越境地域の歴史文化」、『越境地域政策への視点』、愛知大学三遠南信地域連携センター刊、所収。
- ・田崎哲朗（1985）『在村の蘭学』、名著出版。
- ・田崎哲朗（1990）『地方知識人の形成』、名著出版。
- ・芳賀 登（1976）「三河吉田藩における国学の継承」、『歴史研究』（大阪教育大）、第19巻。
- ・山中芳和（1997）「幕末期国学の地域における展開（1）—三河地方における羽田野敬雄の活動を中心に—」、『岡山大学教育学部研究集録』。
- ・山中芳和（1997）「同上（2）」、『同上』。

遠山郷の「霜月祭」については、飯田市美博から詳細ですぐれた報告書が地区別にまとめられている。

本稿は、和田明美編『道と越境の歴史文化—三遠南信クロスボーダーと東西文化』143-169頁、2017年、青簡舎を再掲載しています。掲載論文の著作権に関しては出典元に帰属します。